


 書評

斎藤清二，岸本寛史著

ナラティブ・ベイスト・メディシンの実践

牧原総子

本著は、先に翻訳された「ナラティブ・ベイスト・メディシン(NBM)臨床における物語と対話」の監訳者でもある二人の著者によって書かれている。精神医学や心理学において「ナラティブ」という用語は、1990年代、家族療法におけるポストモダンイズムの潮流の中、White, Mらが「物語としての家族」で用いたものとして馴染みが深く、その後もさまざまな著作が出ている。その中であって本著は、この「ナラティブ」の視点を(精神科に限らず)実際の医療全体に導入し、医療・医学すべての分野をこの視点から再検討する動向として「NBM」を提示、その実践方法を症例を交じえ、わかりやすく紹介している。

本著は、第1部NBMを理解する・第2部NBMを実践するの大きく2部構成になっている。

第1部第1章では、主に「NBM」の紹介がされているが、特に注目すべきはエビデンス・ベイスト・メディシン「EBM」と「NBM」の関係であろう。「EBM」は近代医学の発展に大きく貢献しているが、一方でエビデンスがすべてであるがごとく生物科学的見地に偏りすぎて、人間科学的な部分が見落とされがちである。そうすると「EBM」と「NBM」は対立するものと思われるが、ここでは「両者はむしろ患者中心の医療をするための車の両輪と考えるべき相補的な方法論」と説明され、ここに「NBM」の立場が集約されている。

第2章の面接法では、事例を交じえて、非常にわかりやすくその方法を紹介している。

第3章の研究法では、対話分析法、事例研究

法、狭義の質的研究法の3つを記載している。狭義の質的研究法において、文化人類学で用いられているエスノグラフィー(文化人類学者が異文化集団の中に入り込んでその集団の文化および下位文化を知るために用いる研究法)、社会学者のGlaser BGとStrauss A(看護学を主たる活動領域とし、初期にはターミナルケア領域の研究をしていた)によって提唱されたグラウンデッド・セオリー・アプローチをその方法論として紹介しているが、これは「NBM」が包含する領域の広さを示し、改めて医学が人間科学であったことを思い出させられる。

第2部は、先の研究方法から、対話分析法と事例研究法を取り上げ、詳細に症例を呈示しつつ、その実践方法をていねいに描き出している。特に事例研究法では、先のEBMとNBMとの統合的治療の実際として口腔内灼熱症候群の事例、ターミナルケアにおける「不安の意味論的分析」の事例、「自身のナラティブを生き生きと生きることの障害(失感情症)」としての過敏性腸症候群心身症事例、悪性腫瘍の内科的治療中「語り(ナラティブ)」の代わりに絵画(イメージ)が用いられた事例など、多くの事例が深く厚みをもって報告されている。

生物学的医学がさらに進歩する中、町の臨床家が自然に日々実践していたであろう(著者も谷川俊太郎の談話を巻頭に挙げている)古くて新しい「NBM」の視点に立った医療の実践方法が、ていねいに示されている一冊である。臨床にかかわるすべての方々に役立つであろう。

(神経研究所付属晴和病院)

●A5 264頁 2003 本体4,200円 金剛出版刊